

エスノグラフィーにもとづく比較ケース分析

～定性的研究方法への一視角～

金井 壽広

概要

本稿では、経営学をバックグラウンドとする著者が、一般的なケースメソッドの長所短所と、その短所を補うひとつの方法としての複数ケースの比較分析において、エスノグラフィ的な方法の可能性を議論する。

I. 序

問題意識

組織の内部者は自らの文化をどこまで語れるのか

→ 内部者の間では多くのことが当然のことにように自明視される

(ガーファンケル, ゴフマン, シャイン)

組織の外部者はフィールドワークを通じてより深いレベルで記述できるのか

→外部者は、

内部者が当然だと思っている見解・もののみかたを使って

そのフィールドならではの知識を明白化するという姿勢で

フィールドに入りうる (ギアツ)

→しかし結局は・・・

内部者の言葉でなく

学者として事前に知っている公式的理論からの諸概念で語る自分に気付く

本稿のねらい

エスノグラフィックな比較ケース分析という方法により以下の問題について考えることを通じて、定性的研究方法のあり方を探る

- 現場の生の声を大切にしながら理論を構築するには？
- 既存の公式的理論体系とエスノグラフィの関係は？
- コミュニティや組織の「濃密な記述」(ギアツ 1973) は単なる観察事実の羅列とどう異なるか？

II. エスノグラフィーと異文化理解

エスノグラフィーとは何か（バン・マーネン 1982）

エスノグラフィーは集団、組織、制度、相対的に自己充足的な社会を対象としたアプローチ

- 参加観察
- 公式・非公式のインタビュー
- 内部資料収集
- 写真撮影
- 録音等

エスノグラフィックな探求の結果は文化の記述

- その場でいつも話される特別な言葉の知識
- そこで生じる活動のいくつかに直接参加
- その場からみつけた少数の主要情報提供者との集中的な共同作業に深く依存

エスノグラフィーの目的（バン・マーネン 1982）

ある特定の社会単位のメンバーになるのに必要な理解—社会的に獲得され、共有された理解—を発見し、明らかにすること

エスノグラフィーの帰結

エスノグラフィーは「文化の理解」の理解：内部者に対して自明の考え方や発想を読み取ること

→ エスノグラファーが外部者であるために、内部者には当然視されている仮定や用語について「いったい何のこと？」と繰り返し質問することが可能

なぜ、エスノグラフィックな比較分析が必要か

内部者が暗黙のうちに共有している意味世界を理解し、理論化するためには、対照的な組織との比較が必要だから

III. 比較ケース分析と理論的サンプリング

III-1. 単一ケース分析の弱い基準と複数ケース分析の必要性

ケーススタディとはなにか（イン 1984）

ケーススタディというのは、次のような特徴を持つ経験的探求である

- 現象と脈絡との境界が明確に分かっていないときに

- 複数のデータ源を活用して
- ありのままの現実の脈絡のなかで現在生じている現象を調べる

単一ケースにもとづく研究の評価基準

- (1) ユニークさ、新奇性、あるいは極端さ
- (2) 普遍性・典型性・代表的であること
→基準を満たしているかどうかは、複数のケースと比較してみないとわからない
→新奇性と普遍性の基準の適合度はケースの蓄積とともに変化する

Ⅲ-2. 理論的追試と理論的サンプリング

理論的追試 (イン 1984)

ケースを実験になぞらえ、複数ケース分析を「追試」という言葉で表現

- 類似の結果を予測する「忠実な追試」
- 反対の結果をもたらすが予測可能な理由でそうになっている「理論的追試」

「理論的追試」≠「理論的サンプリング¹ (グレーサ&ストラウス 1967)」

Ⅲ-3. 理論的サンプリングによる比較ケース分析の実際

ある組織現象に固有な理論的属性を解明

- クラフト組織と官僚制組織 (スティンチコム 1959)
- 有機的組織と機械的組織 (バーンズ&ストーカー 1961)
- 単品受注生産、大量生産、装置生産の比較組織論 (ウッドワード 1965)

新たな仮説の発掘・現場の人びと自身の抱く「生の理論」「根づいた理論」を発見

- クラブ型組織とサークル型組織の比較 (金井 1988a)

Ⅲ-4. 比較ケース分析におけるエスノグラフィーと他の調査方法の併用

比較ケース分析とサーベイ法

比較ケース分析から発見されたタクソノミーをサーベイ法で確認

¹ 理論的サンプリングとは、カテゴリーとその特性を発見しすべてのカテゴリーが飽和するまでサンプリングを継続する方法。

http://www.okayama-u.ac.jp/user/le/psycho/member/hase/yh-seminar/2003/Fujita_30508.htmlなどを参照

IV. 定性的比較ケース分析におけるエスノグラフィーと臨床的方法

組織理論における臨床的方法（シャイン 1987）

プロセスコンサルテーション

依頼人（クライアント）によって設定された状況を改善するために（中略）依頼人が（中略）それに働きかけるのを助けるというコンサルタントの（中略）一連の活動

→対象の方から調査を依頼してくるのでデータを収集しやすい

但し・・・

→ コンサルタントに「記述」以上の責任が生じる

→ 依頼人の自己治癒力が問題解決の鍵

プロセス促進者（**process facilitator**）と内容専門家（**content expert**）

プロセス促進者：問題解決に向かうプロセスの障害を解決する人

内容専門家：その道の権威として依頼人の問題解決の答えを提供する人

→コンサルタントがプロセス促進者であれば、プロセスコンサルテーションは定性的データ収集方法である

臨床的方法における研究者と組織の関係

プロセス推進者なので階層性を持ち込まず、ピア・ディスカッション（金井 1989）の場が存在する

比較ケース分析における長所短所

組織の劇的な動態に出会えるかどうかは偶然に左右される

臨床的方法はアクションリサーチと類似で、臨床家は組織のゆきぶり役
エスノグラファーは対象組織の通常状態に介入しない

現場の声から得られるデータの深さと結果の公表における障害が異なる

臨床的方法では、他の方法では聞けないレベルまで深く進みうる代わりに、結果を公開するためには、様々な配慮が必要

エスノグラフィーは研究の焦点に応じて問題を深掘しうるが、臨床的方法のような深いレベルのデータ収集は困難

学術研究としての利便性

臨床的方法は依頼人の要望がなければ開始できず、複数ケース間の焦点が異なるため比較困難（理論的サンプリングが困難）、あるいは事後的にならざるを得ない

エスノグラフィーは計画的に適用できる

→ 臨床的方法とエスノグラフィーは相互補完的
 臨床的方法で得られたデータはエスノグラフィーでも使用しうる

表 1 定性的研究における臨床的方法とエスノグラフィックな方法

	臨床的な方法	エスノグラフィックな方法
誰のニーズによりプロセスが動き出すか	<ul style="list-style-type: none"> ● 依頼人（クライアント） 	<ul style="list-style-type: none"> ● 研究者自身
問題の源泉、焦点	<ul style="list-style-type: none"> ● （組織の）病理、依頼人のかかえる問題 	<ul style="list-style-type: none"> ● 研究そのもの もしくは理論上の問題点
モチベーションの源泉	<ul style="list-style-type: none"> ● （組織の）病理に対処し、克服したいという依頼人の欲求 	<ul style="list-style-type: none"> ● 知識を新たに追加したいという研究者の欲求
作業のベース	<ul style="list-style-type: none"> ● 依頼人/問題しだい 	<ul style="list-style-type: none"> ● 研究者の欲求しだい
概念上の焦点 （法的/心理的）契約	<ul style="list-style-type: none"> ● 規範的；病理的側面重視 ● 報酬に応じた用役 ● 「誤謬」への法的責任 	<ul style="list-style-type: none"> ● 中立的；通常状態重視 ● （結果の）フィードバックへのアクセス ● （組織への）参入と協力
収集されるデータのタイプ	<ul style="list-style-type: none"> ● 深い；病理的側面重視 ● 理論/モデルが支え ● 主題に焦点 	<ul style="list-style-type: none"> ● 広範もしくは深い；研究上の焦点重視 ● 観察（そのもの）が支え、もしくは理論が支え ● コンテキストに焦点？
（調査）結果の公刊	<ul style="list-style-type: none"> ● 偽名にしたケース ● 一般化・（複数の）ケースからのモデル ● 依頼人の承諾 	<ul style="list-style-type: none"> ● 正体を明示した、もしくは偽名にした諸集団の濃密な記述；中傷的な一般化 ● 研究者のイニシアティブ

本文より引用

V. 研究スタイルのバラエティー結びにかえて

「シングル・スタイル」「マルチ・スタイル」

表 2 研究スタイルのバラエティ

シングル・スタイル	マルチ・スタイル
<ul style="list-style-type: none"> ●抽象度の高い論理を指向する ●理論は偉大な(?)研究者の頭が生み出す ●モデル構築を重視する ●理論からの仮説を検証する ●「典型的」「平均的」動きにこだわる ●単一ディシプリンを極める 	<ul style="list-style-type: none"> ●フィールドに根付いた理論を指向する ●理論は現場の人の声から引き出される ●ケース(事例)の濃密な記述を重視する ●現場の声から理論につながる仮説を発見する ●「驚き」や「戦略的」細部にこだわる ●学際性を求める

本文より引用

経営学は学際的であるにもかかわらず、単一のディシプリンに依拠することが多くシングル・スタイルになることが多い

←→ 組織のケースを書く際は「なんとなく書けるもの」とされてきた?

組織のケースはマルチ・スタイルで書かれるべきだが意識が低いのが現状

組織は個別諸学では解けない問題が山積

→ある成功したパラダイムの下で解ける範囲の問題を解く制度化された科学(シングル・スタイル)から、現場の声まで下降し、観察や診断によって新しいパラダイムを生成する(マルチ・スタイル)と言う方向性が必要

コメント(但、きわめて個人的体験にもとづく問題意識として・・・)

- 完全なエスノグラファーとして企業組織に入っていくことは可能か?
- 組織研究において、完全なるエスノグラファーたるべきか?
 エスノグラファーを受け入れてくれる企業組織なんて存在するのか?
 組織の側が研究者=先生だと思ってイロ眼鏡で見ることがある
 ピアディスカッションは成立するか?
 内容専門家として多少なりとも貢献することを期待されるジレンマをどう解消するか
 究極の選択; 対象組織との信頼関係と研究データの収集どっちが大事?
- 組織を研究する研究者はなぜエスノグラフィーが苦手なのか
 エスノグラフィーは偉い先生に限って嫌い・・・?
 方法論としてエスノグラフィーを学ぶにはどうしたらいい?

- それでもやっぱり生の言葉で語られるストーリーは面白い
エスノグラフィックな方法論を社会学以外の分野で、研究の成果に効果的に利用
するコツは？